

# 13 課

3月28日

## 神の御心をすべて確信する



安息日午後 3月21日

### 暗唱聖句

すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって、神があなたがたに求めておられることである。(1テサロニケ5:18、口語訳)

どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。(1テサロニケ5:18、新共同訳)

### 今週の聖句

コロサイ4:7～18、エフェソ6:21、使徒言行録15:36～40、  
IIテモテ4:10、11、IIペトロ3:10～14、イザヤ60:1～3

### 今週のテーマ

コロサイの信徒への手紙の最後の部分は、パウロの共労者たちの幅広いネットワークを明らかにしており、使徒言行録は、パウロがまずバルナバとチームを組み、次にシラスと組んだことを示し、3回にわたる宣教旅行の概要を描いています。

今週は、パウロの宣教戦略について見ていきます。彼は、ローマ帝国の主要な中心地に伝道するうえで時間と資源を非常に効率よく用いる一方、コロサイ、ラオディキア、ヒエラポリスなど、彼が訪問していなかったであろう都市や町に伝道するために、有望な信徒の働き手を訓練しました。

パウロは旅の途中で直接訪問したり、とりわけ獄中にあつたときは、書簡を送ったりすることで、常に人々と教会を結びつけていました。福音宣教の成功は、すべての人——ユダヤ人クリスチャンも異邦人クリスチャンも、男も女も、例えば、ティキコ、アリストアルコ、ユスト、エパfras、ルカ、ニンファたち——が協力し合うことにかかっていると、彼は認識していたのです。興味深いことに、彼がラオディキアの教会に書き送った手紙もあったと記されていますが、それは現存していません。パウロは、この手紙の最後の数節の中に、アルキポという人物への個人的な励ましも含む、多くのことを記しています。彼はまだできるうちに、教会を強めるためのあらゆることを行なったのです。

福音を広めることについて、私たちはパウロから多くのことを学ぶことができます。彼の宣教旅行は、推定で2万1500キロメートルに及びました。これは驚くべきことです。その多くは徒歩であり、彼は牢獄にいた時期もありました。

パウロは、コリントやエフェソなど、貿易の中心地でかなりの時間を過ごしました。そこから、メッセージは内陸の町々に広がっていきました。彼はまた、自分が立ち上げた教会に戻り、その新しい信者を力づけ、励ましました。教会を直接訪問できないときは、手紙を送りました。こうすることで、信者たちは、パウロが自分たちのことを覚え、気にかけてくれていることを知りました。

**問1 コロサイ4：7～9を読み、エフェソ6：21と比較してください。ティキコは、どう評されていますか。パウロは、ティキコとオネシモをコロサイに送る理由を、どう説明していますか。**

文書で伝えるよりも、口頭で伝えるほうがよいこともあります。2人はコロサイの信徒にどのような知らせを伝えたのでしょうか、興味深いところです。パウロがその知らせでコロサイの信徒を「励ま(す)(コロ4：7～9)ことを意図していたことから判断すると、おそらく獄中の彼の状況についての詳細が含まれていたと考えられます。いずれにせよ、そのようなコミュニケーションは、信者を結びつける個人的な絆を保つ手段としても重要でした。

ティキコは、明らかに信頼されている使者で、その名前は、「幸運な」という意味でした。「忠実に仕える者、仲間の僕」と評されている彼は、エルサレムの困窮する信者のための募金を運ぶ旅に同行するよう、パウロによって選ばれたアジア州出身の2人のうちの1人でした(使徒20：4)。彼はまた、パウロがローマで二度目に投獄されたときも一緒に、エフェソの働きを強めるために、ローマから派遣されました(Ⅱテモ4：12)。パウロは彼をクレタ島のテトスのもとに遣すことも考えました(テト3：12)。パウロに付き添っていたのはオネシモで、彼はパウロによってローマで改宗し(1課参照)、「忠実な」人物と評されています。

パウロは、コロサイの信徒の状況も知りたかったようです。ティキコ自身でなくても、ほかの誰かによって彼にその様子を知らせることは難しくなかったでしょう。これは、パウロがコロサイの教会を直接訪問したことがないにもかかわらず、そこにいる信徒に対する愛と関心を伝え、彼らがほかの人々に伝道できるように信仰を強めるためのもう一つの方法でした。

インターネット、ソーシャル・メディア、そして数え切れないほどの機器によってつながっている世界にあって、パウロが直面した課題を想像することは困難です。その課題とは、教会員が、自分たちの所属する教会よりずっと大きなものの一歩であると感じられるようにすることでした。

**問2** コロサイ4:10、11を読んでください。使者を通してメッセージをやり取りする以外に（コロ4:7～9）、パウロはどのような方法でつながりを促進しましたか。パウロがこの書簡で取り組んでいる問題のいくつかを考慮すると、これらの挨拶を通して、どのようなメッセージが伝えられているのでしょうか。

これらの挨拶によって、パウロは仲間の信者たちの間につながりを作り、育んでいます。ここで、マルコがバルナバのいとこであったことがわかります。パウロは、マルコがコロサイを訪れるであろう際の下準備をしているのです。アリスタルコは、直訳すれば、「戦争捕虜の仲間」と呼ばれています。つまり、彼はパウロと一緒に投獄されていたのです。2人とも、「神の武具」（エフェ6:10、11）を身に着けた兵士であり、サタンの捕虜を解放して神の国で奉仕させるために戦っていました（Ⅱテモ2:1～4参照）。イエス／ユスト（ギリシア語では、ユダヤ名とローマ名の音が、サウロ／パウロのようによく似ている）も、福音の信頼できる共労者として推薦されています。

パウロは、アリスタルコ、マルコ、ユストがユダヤ人の信者（「割礼を受けた者」）であることを強調しています。次に、エパfras、ルカ、デマスという3人の異邦人について言及します（コロ4:12～14）。ユダヤ人と異邦人の間に教会内で多少の緊張があったにもかかわらず、これらの共労者が一緒に、団結して、調和して効果的に働くことができている点は重要です。しかしパウロは、「だけ」という言葉を使うことで、多くのユダヤ人クリスチャンが自分の働きに加わってくれなかったことへの、ある種の失望をほのめかしているようです。とはいえ、何年か前にパウロとバルナバとの最初の宣教旅行中に離脱したヨハネ・マルコが（使徒13:13、15:36～40）、この時、パウロに忠実であるだけでなく、「慰め」にもなっていたことは、意義深いことです。

一致に対する脅威は、今に始まったことではありません。近年、アドベンチスト教会は、世界中に広がるにつれて大きな変化を経験し、その一致はさまざまな力によって揺さぶられてきました。一致に対するこのような圧力は、教会のあらゆるレベルで感じられます。

目的主導型の生活や教会に関する本が書かれています。「目的主導型」という言葉は適切ではないかもしれませんが、有意義な努力を成し遂げるには、明確な「目的の焦点化」が不可欠です。パウロの生涯と宣教、そして彼の共労者やほかの使徒たちの生涯と宣教は、この焦点化を体現しています（フィリ3：13、14参照）。福音がローマ帝国全土とその外にまで急速に広まったというその結果が、すべてを物語っています（コロ1：23）。今日も同じ焦点化が必要です。

**問3 コロサイ4：12、13を読んでください。どのような目的が記されており、それはいかにして達成されますか。**

先の課（1課）で述べたように、エパfrasはたぶん、コロサイと、その近郊のラオディキアやヒエラポリスへの福音の普及に貢献したと思われます。これらの教会に対する彼の挨拶と祈りは、間違いなく、そこの信者たちにとって大きな励みとなりました。エパfrasの祈りには、明確な焦点がありました。コロサイの信徒が「完全な人となり、神のすべてのみこころを十分に確信して立つ」（コロ4：12、新改訳）ことです。この祈りの意義深い要素を、もっと注意深く考えてみましょう。

「完全な」——この言葉は、「すでに得た」と決して主張することのない人たち（フィリ3：12～15）が、犠牲的な愛（マタ5：44、48）において究極的にあらかわす品性の完全さを指します。

「神のすべてのみこころ」——パウロ自身、コロサイの信徒が神の御心を悟り、「神の栄光の力」（コロ1：11）によって、「すべての点で主に喜ばれるように主に従って歩（む）」（同1：10）ようにと祈っていました。

「十分に」——この力強い言葉は、完全に満たす、何かをすべて達成するという意味です。人間的には不可能に思えても、神は約束したことを必ず実現されるとアブラハムが「**堅く信じ（た）**」（ロマ4：21、新改訳）という聖句や、パウロが主によって強められ、彼を通して福音が「**余すところなく宣べ伝え**」（Ⅱテモ4：17、口語訳）られるといった聖句で用いられています。

「立つ」——この言葉は、揺るぎなく、堅く立つことを意味しており、それは、「揺るぐことなく信仰に踏みとどまり」（コロ1：23）、福音の真理を確信することによってのみ可能となります。パウロは同じ言葉を、「悪魔の策略」（エフェ6：11）との戦いや、「神の武具を身に着け（る）」ことで（エフェ6：10～18、Ⅱテモ2：19と比較）神の力によって闇の勢力に抵抗することに関して、何度も用いています。

問4 コロサイ4:14、15とIIテモテ4:10、11を読んでください。ルカは、デマスとどのように異なりますか。理由を挙げてください。

使徒ヨハネは、「世も世にあるものも、愛してはいけません。世を愛する人がいれば、御父への愛はその人の内にありません」(Iヨハ2:15)と述べています。ルカは、イエスとその王国を愛していたので、何があろうと最後までパウロのそばにいましたが、デマスは来世よりもこの世を愛したのです。

問5 次の聖句を読んでください。再臨を待ち望む人々に対して、どのような勧告が与えられていますか。

- (1) マルコ13:32~37
- (2) テトス2:11~14
- (3) IIペトロ3:10~14
- (4) 黙示録3:17~21

イエスと使徒たちは、不意を突かれないように、「目を覚まし」、油断せず、いつも主の来臨に備えていなさいと、私たちに何度も警告しています。残念ながら、「目を覚まして祈っていなさい」(マコ14:38)というイエスの命令に聞き従うことができなかつた弟子たちのように、多くの人が必要な準備をしていないでしょう。結局のところ、誰が、あるいは何が、私たちの心を占めているかにかかっています。私たちは2人の主人に仕えることができないのです。

ラオディキアへのメッセージで、イエスは私たちに明確な処方箋を与えておられます。第一に、罪を悔い改めること、第二に、私たちの心をイエスに開き、イエスに主導権を握っていただくことです。そうすることで(第三に)、試練によって試され、誘惑に打ち勝った信仰と愛の「金」を手に入れることができるのです。

あなたの生活の中で、具体的にどのようなことを悔い改めるよう、イエスは求めておられるでしょうか。あなたが最も必要としているのは、イエスの処方箋のどの部分ですか。

問6 コロサイ4:16~18を読み、同2:1~3と比較してください。ラオディキアへのイエスのメッセージ(昨日の研究参照)について考えるとき、パウロの時代のラオディキア教会でも読まれることになっていたコロサイの信徒への手紙との間に、どのような関連性を見いだせますか。

神の民の歴史を見ると、はるか昔から同じ問題が何度も起こっています。預言者たちは、この世と同じように礼拝しようとするイスラエルを叱責し、手遅れになる前に悔い改めるよう促しました。イザヤは、「どうして、遊女になってしまったのか/忠実であった町が」(イザ1:21)と嘆き、神に立ち帰って赦〔ゆる〕しと清めを受けるよう、人々に促しました(同1:16~20)。バプテスマのヨハネも(マタ3:2, 8~10)、イエスも(同4:17, 12:33~37)、悔い改めて終わりの日の裁きの試練に耐えられる実を結びなさいとイスラエルの人々に呼びかけました。使徒たちも同様のメッセージを伝えました(使徒2:38, 3:19, 17:30, IIコリ7:9, 10)。

問7 次の聖句をそれぞれ比較してください。イザ60:1~3と黙18:1~4。イザ62:1~5と黙19:7, 8。これら二つの書のメッセージには、どのような共通点がありますか。

神は天と地を一つにされます。しかし、大争闘のために、それは段階的に行われなければなりません。

- (1) カルバリーにおいて、サタンは天の被造物の間に残っていた彼に対する愛情をすべて失いました(ヨハ12:31)。
- (2) 天の聖所におけるキリストの裁きの働きによって、神の民は、「御心を行うために、すべての良いものを……備え」(ヘブ13:21)、天国にふさわしい者となります。
- (3) 千年期の裁きと千年期後の最後の裁きを通して、残された疑問はすべて永遠に解決され、罪と悔い改めない罪人は永遠の火の池で滅ぼされ、その火は地球も清めます(黙21:8)。
- (4) 罪が終わって初めて、天と地は最終的に一つになることができます(黙21:3)。

「キリストに屈服した魂は、キリストご自身の<sup>とりで</sup>砦となり、キリストはそれを背いた世の中に保たれる。キリストはそこでご自身の権威よりほかの権威が認められないように望まれる。このように天の勢力によって占領された魂は、サタンの攻撃に攻め落とされることがない。しかしわれわれは、キリストの支配に服していないときに、悪魔に支配される。われわれはこの世の主権を争っている二大勢力のどちらかに必然的に支配されるのである。

暗黒の王国の支配に入るためには、わざわざその国の奉仕を選ぶ必要はない。光の王国と同盟することを怠りさえすればよいのである。もしわれわれが天の勢力と協力しなければ、サタンは心を占領してそこを永住の地とする。悪に対する唯一の防備は、キリストの義を信じる信仰によって、心のうちにキリストに内住していただくことである。神との命のつながりを持たないかぎり、われわれは、利己主義、放縦、罪への誘惑などの汚れた影響に抵抗することは決してできない。われわれは、多くの悪い習慣をやめ、しばらくの間はサタンとの交わりを断ち切っているかも知れない。だが時々刻々に神に献身することによって、神との命のつながりを持っているのでなければ、われわれは打ち負かされてしまう。キリストを個人的に知り、絶えずキリストと交わっていないければ、敵の思うままになり、ついには敵の命じるとおりのことを行うようになる」(『希望への光』835ページ、『各時代の希望』第33章)。

### 話し合いのための質問

- ① 金曜日のエレン・ホワイトの引用文を見てください。大争闘には二つの側しかなく、私たちは意識的にキリストを選ばない限り、サタンの側になることになります(ルカ 11:23)。この考えが私たちの感情を不快にさせるとしても、神は、ご自分の真理を人々の好むように変える義務を負ってはおりません。この事実は、あなたの意志をキリストに委ねることがどれほど重要であるかについて、どのようなことを教えてくださいか。
- ② 黙示録 14:14～16 を読んでください。ペンテコステの「先の雨」は、福音の種が芽を出し、成長することを可能にしましたが、「のちの雨」は最後の収穫のために地上を備えさせます。黙示録 14:12 は、この予告といかに関係していますか。
- ③ 教会全体として、また個々の信者として、私たちは周囲の文化や世界から、いかにさまざまな形で影響を受けていますか。いつの時代においても、神の民にとって問題であったこの世の悪影響から、私たちはどうしたら守られるのでしょうか。